

# 在宅緩和ケア —疼痛コントロールの技術



鈴木 央 著 (鈴木内科医院院長)

本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。

▶HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶登録手続

**Introduction** ..... p2

**1** 痛みの評価 ..... p4

**2** 薬剤選択, 使いわけのコツ ..... p9

**3** 持続皮下注射のコツ ..... p13

**4** 呼吸困難への対応 ..... p16

**5** 非がん疾患の疼痛緩和 ..... p18

**6** 在宅緩和ケアで最も重要なこと ..... p18

▶HTML 版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

# Introduction

---

## 1 痛みの評価

### (1) 痛みの原因

- ・内臓に由来する痛み（内臓痛）
- ・腹膜，胸膜，内臓被膜由来の痛み（体性痛）
- ・骨転移痛
- ・消化管閉塞の痛み
- ・筋痙縮による痛み
- ・がんによらない痛み

### (2) 痛みの種類

- ・侵害受容器由来の痛み
- ・神経障害性疼痛
- ・骨由来の痛み
- ・筋由来の痛み（悪性腸腰筋症候群など）
- ・スピリチュアルな痛み

### (3) 痛みの程度

- ・どんなときに痛みが強くなるか，それとも弱くなるか
- ・痛みの持続時間
- ・夜間の痛み，体動時の痛み
- ・突出痛への対応

## 2 薬剤選択，使いわけのコツ

### (1) 薬の強みを知る

- ・少し触るだけでも痛い神経障害性疼痛
- ・歩くと痛む骨転移痛
- ・複雑な痛み：神経障害性疼痛と侵害受容器由来の痛みの混合痛

- ・がん性腹膜炎
- (2) 薬の副作用を知る
- ・オピオイドの換算
  - ・使って損のないステロイド

### 3 持続皮下注射のコツ

- ・経口による服薬が困難になったら
  - ・貼付薬や坐薬でのコントロールが難しい場合は持続皮下注射を！
- \*CADD-Legacy® PCA Model 6300 (スミスメディカル・ジャパン社)
- \*テルフュージョンTM小型シリンジポンプTE-361PCA (テルモ株式会社)
- \*ディスポーザブル型ポンプ (PCA機能付き)

### 4 呼吸困難への対応

- ・MST (Morphine Steroid Tranquilizer) 療法
- ・筆者の対応

### 5 非がん疾患の疼痛緩和

- ・非がん疾患性疼痛への対応のコツ
- ・痛みをゼロにすることを目的としない

### 6 在宅緩和ケアで最も重要なこと

- ・患者，家族，チームメンバーとのコミュニケーション

## 1 痛みの評価

終末期（緩和期）のがん患者の在宅療養を支援することは、在宅医療において必須のスキルのひとつになっている。WHOがん疼痛ラダーの考え方をふまえながら、それぞれの症例に対して十分な疼痛対策がなされているだろうか？

本コンテンツでは、基本をふまえつつ、在宅での疼痛コントロール技術について触れていきたい。

がん患者が痛みを訴えたときに考えるべきポイントは、痛みの原因、性状、強さである。特に原因と性状には重要なつながりがある。

たとえば、病変の局在がどこにあり、患者の訴える痛みと相関があるかどうか、その痛みが内臓痛であるのか、より局在がはっきりした体性痛であるのかを考えることが重要である。

### (1) 内臓痛と体性痛（侵害受容器性疼痛）

持続的な内臓痛はオピオイドにて緩和しやすい疼痛と言えるが、内臓皮膜や腹膜播種による体性痛になると、オピオイドのみでの緩和はやや困難となり、非ステロイド性抗炎症薬（Nonsteroidal Anti-Inflammatory Drugs：NSAIDs）やアセトアミノフェン、あるいはステロイドの力も借りる必要が生じてくる。

### (2) 骨転移痛

骨転移の痛みは、叩打痛を伴うことが多く、体動に合わせて悪化することが少なくない。NSAIDsの種類をマイルドなものからシャープなものに変更（ロキソプロフェン→ジクロフェナクなど）することや、骨芽細胞の活性を抑えるためビスホスホネート製剤（ゾメタ<sup>®</sup>など）やデノスマブ（ランマーク<sup>®</sup>）の併用のほか、緩和的放射線療法も考慮する。生活支援の立場からは、突出痛がしばしば出現する体動（トイレ歩行や入浴、着替え、散歩